

「日々の理科」(第 2342 号) 2020, 12, 10

「ヤマノイモの果実 (2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

「ヤマノイモ」*Dioscorea japonica* は、3 種類の方法で繁殖する。一つは「担根体」と呼ばれる地下の部分。これは「根」とも「茎」ともとれるような部分で、ヤマノイモの他、一部のシダ植物にも見られる。市販の「自然薯 (じねんじょ)」(可食部) はこの部分だ。二つ目は「むかご」。これはユリ科の植物の葉脇に見られる無性生殖的な繁殖器官の一つだ。ヤマノイモのむかごは食用になり、ブルーベリーと同じように透明パックに入ったものを見かけることもある。



三つめが「種子」である。私が子どもの時に遊んだ、写真の「物体」は蒴果 (さくか) と呼ばれている。

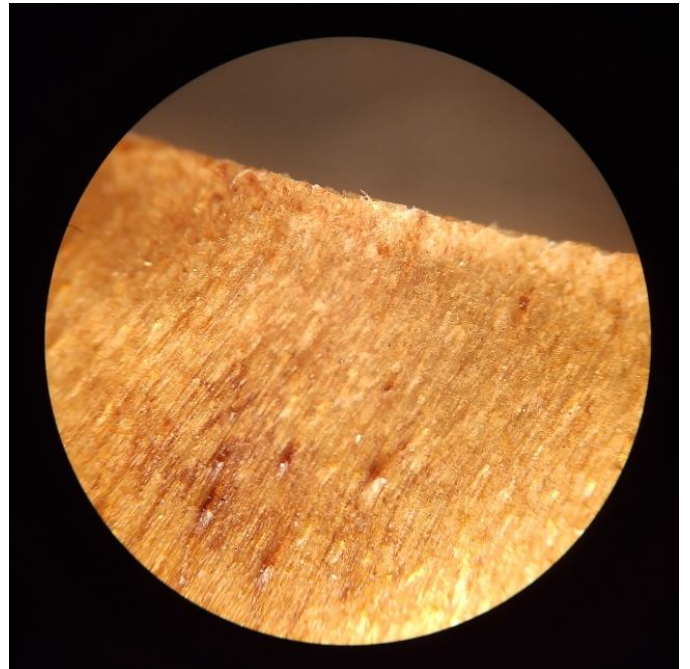


ヤマノイモの蒴果は、行事軍配のような形をした 3 枚の薄片が互にくっついた構造で、その隙間に種子が 1 個ずつ入っていることが多い。種子は「翼」を持

ち、蒴果が開いたあとに、風に乗ってある程度の距離までは飛ばされる。種子の形状はハネフクベ (アルソミトラ) *Alsomitra macrocarpa* によく似ている。アルソミトラは、インドネシアに自生する常緑高木で、頭蓋骨のような硬い果実から、おびただしい数の翼付の種子を散布し、まるでグライダーのように飛翔させることで有名だ。



私がヤマノイモの果実に最も心ひかれる点は、その表面の質感である。黄色でもイエロー・オーカー (黄土色) でもなく、明らかに「金色」をしている。まるで「金泥」をまぶした、人工的な工芸品のように見える。私は表面を顕微鏡で観察してみたいと思った。



果実の実体は硬く不透明なので、透過光で観察しても「真っ黒な板」にしか見えない。倍率 40 倍、反射光で見た画像がこの写真だ。拡大しても金色だった。細い繊維状の細胞がぎっしり並んでいて、それが一定の方向に光を反射して「金色」に見せているのだろう。